学校改善研究紀要 2024：177

ブックレビュー

篠ヶ谷圭太著『予習の科学:「深い理解」につなげる家庭学習』図書文化（2022）

生田　淳一
福岡教育大学　j-ikuta@fukuoka-edu.ac.jp

本書は，予習に関する心理学研究の第一人者である篠ヶ谷圭太氏（日本大学教授）の著書である。学力低下問題や学力格差問題などの学力をめぐる議論を整理した上で，予習に関する心理学研究をわかりやすく紹介している。全体を通して，学校が抱える課題と乖離することなく心理学研究から得られた知見を理解することができる。そのうえ，エビデンスに基づいた提案には説得力がある。学力向上をめざした学校改善を考えている教育関係者に，本書をお勧めしたい。

本書の構成は，なぜ予習に注目するのか（第 1 章），予習の効果と背景要因（第 2 章），予習から深い理解へ（第 3 章），授業の影響力（第 4 章），予習を取り入れた授業設計（第 5 章），効果的な予習指導のポイント－本書のまとめ（第 6 章）となっており，心理学研究から得られた知見の理解にとどまらず，教育実践へつなげる道筋が示されている。特に，第 6 章で指摘されている学習指導に予習を取り入れる際の注意点は，これから予習にチャレンジして学校改善を進めようとする学校や，授業改善に取り組む教員にとって多くの示唆を与えてくれるはずだ。たとえば，学習を事前学習―本学習―事後学習という 3 つのフェイズ（段階）に分けて捉える視点は，家庭学習も含めた学習者の学習過程を見直す際に有効な視点となる。

本書のタイトルにあるように，「「深い理解」につなげる家庭学習」が実現されれば，学校改善の大きな成果となる。「深い理解」を実現するには，家庭学習だけ，授業だけ，では不可能だろう。さらに，家庭学習の充実には，家庭（保護者）の力を味方につける必要がある。授業も家庭学習と連動したものである必要があり，授業改善も大きく進展しなければならない。おそらく，「深い理解」につなげる家庭学習の実現には，学校の総合力が試されることになるだろう。

学力向上をめざした取り組みにおいて家庭学習の充実が図られるケースは多いが，復習やドリル学習に偏りがちで，予習に着目した取り組みは少ないように思われる。予習に取り組むことは，これまでの教育観や学習観を大きく転換するようなハードルの高いチャレンジになっているようだ。このような新たな教育観・学習観への転換に挑む学校改善のプロセスについての教育実践研究が行われることで，学校改善のプロセスについての理解も進むと考えられる。今後，予習に関わる教育実践研究の進展に期待したい。

さらに，小学校を中心にした義務教育段階における実践の進展にも期待したい。小学校の学びに関していえば，篠ヶ谷氏も指摘するように，学習内容がさほど複雑でないため，授業だけで理解できることが多く，家庭学習でも単純な反復作業で定着を図ることが可能と思われる。しかし，現在「学び方を学ぶ，身につけること」が重要な課題となっている。篠ヶ谷氏も指摘するように，予習をしながら自分の理解を深めていく力は，生涯わたって効果的に学び続けるために必要で，ぜひ子供たちに身につけさせたい力である。

今後，予習をいかした学校改善・授業改善に取り組みやすい環境が整いそうだ。2024 年度小学校，2025 年度中学校の教科書の改訂では，ICT との親和性の高い教科書へと進化が進み，教科書の活用を主軸にした予習に注目が集まるはずだ。また，小中学校の授業を 5 分短縮し、年間で計 85 時間を弾力的に運用することも議論されている。今後は，ますます「前学習―本学習―事後学習という学習フェイズ」を意識すること，つまり，いかに授業と授業以外の学習の連動を意識した学習過程をマネジメントするか，が問われるはずだ。これからの授業改善では，学習過程の心理的プロセスを考慮した学びの転換が求められるが，その際に予習に着目することは打開策の一つとなるだろう。今後，授業実践や教育実践と結びついた予習研究が進展することに期待したい。